昭和初期のシティサイクル「ゼブラ号」　（１９３８年頃）

日本の自転車保有台数が二百万台を超えたのは大正９年で、主に荷物を運ぶために利用されていました。その後、製造技術の上昇と価格の低下により保有台数は昭和１３年に八百万台を超え、通勤通学用としても利用されるようになりました。

昭和１３年頃に造られた「ゼブラ号」は現代のシティサイクルに相当するものですが、車体やサドルの形などに違いが見られます。

また前輪の泥除けの上に風切りと呼ばれる扇形の板が付けられています。車名やマークを書いた一種の看板ですが、大正期末頃からオートバイに真似して付けられるようになりました。その後様々な形が登場しましたが、昭和３０年代にハンドルの前にカゴを付けるようになると、その姿は消えていきました。

自転車文化センター　　谷田貝一男